

一枚の絵図を追って

——田村勘次郎の寄進した今熊山奉灯——

峰岸 秀雄

市史編さんの過程で、膨大な資料のなかから一枚の絵図が見付かった。この絵図には『今熊山奉燈』とあり灯籠の絵が寸法と共に詳細に描かれている。「高サ八尺（約三四二センチ）重サ壹基に付一〇六貫（約四〇〇キロ）」とあり相当大きなものようである。「納主下店内」とあり刊を本店とする店内の主人たち十五人が奉納したものと思われる。標高五〇五メートルの今熊山は八王子市の西北部、五日市町との境にあり。山頂に神社が祀ってある。絵図にある灯籠の存在を確かめるべく尋ねた。

今熊山は「新編武蔵風土記稿」によれば「村の西の限りにあり登り十八町、山の広さ九町歩あり今熊野山と云い絶頂に社あり、今熊野権現と称す或いは異名して呼叫山（よばわりやま）」と号す、この山霊験あること四五十年は頗る繁昌し、江戸、相模、上総、下総、常陸、上野、下野、甲

斐その余の国々より尋ね来りて、神恵を願うもの常に絶えずして」とあるように江戸期はもとより、明治から昭和十一年代頃まで、たいへん賑わった信仰の山である。

ところが昭和十七年四月五日正午頃、西側の刈寄山から今熊山に至る約四キロのハイキングコースを中心に、ハイカーの焚火の不始末から出火し、おりからの強風にあおられ山頂の本殿、拝殿はもとより、拝殿の直ぐ下にあった神官の居宅、茶店等に至るまで灰燼に帰した。

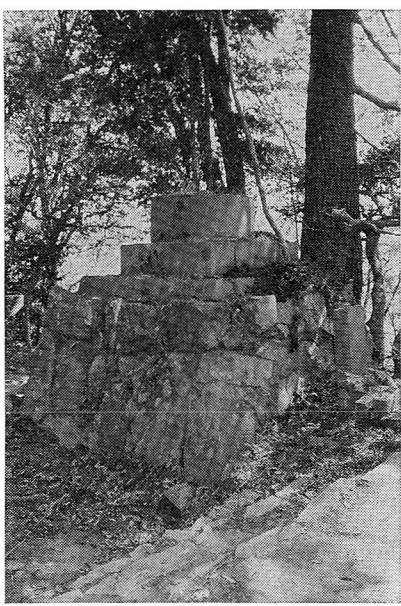
当時の新聞によればハイキングコースを中心に三〇数ヶ所から火の手が揚がり、約六〇〇町歩（五九四ヘクタール）の山林を焼き、業火は同夜八時三〇分降雨のため鎮火している。

この火災で灯籠は焼き崩れていないだろうか。たとえ強火に耐えて残ったとしても、大東亜戦争のさなか金属類の

供出に遭わなかったかなどと思いつながら道をいそいだ。
 表参道から登った登り口には新しい立派な拜殿が建っている。中腹あたりの参道や山中の土は赤黒く焼ただれていて、四十八年隔てた現在でも、当時の火災のすごさを物語っている。山頂への途中には壊れた石灯籠、石段の手摺りなどがいくつもある。傍わらの竹やぶの中にもある。完全な形をしたものもいくつか建っているが、それらのなかにはめざす灯籠は見あたらない。山頂に近い所に大きな灯籠が建っていたと思われる台座があった。山頂に向い右側の台座は完全に崩れ落ちているが、左側はかろうじて写真のように残っている。台座のまわりの土や落葉を



今熊山奉燈図



鉄灯籠の乗せられていた台座

除くと石工の名前があり、「信州高遠住・石工有賀勝五郎」と読み取れた。他に何か残っていないかと、山頂まで登って見たが何の手がかりもなかった。
 そこで今熊神社の川口宮司を尋ね話しを伺った。宮司の話では昭和十七年の火災のさい神社関係の書類等、皆焼けてしまったとのことであった。だが二点だけ火災をまぬがれた神社に関する書類が残っているとのこと、早速拝見させていただく。「昇格申請」と題するものである。
 それは昭和十五年に神社の社格の昇進を東京府知事に申請提出した書類の綴りで、古くは享和元(一八〇一)年の神社由緒書をはじめ、勝安芳(海舟)の奉納した「今熊大神」の書など、江戸後期から昭和初期までの神社への奉納



奉納された灯籠（絵はがき）

物の寄進者の名前が銘記されていた。近在の町村はもとより遠くは大阪、三重の津、外国ではシンガポール、また祈願者にいたっては満洲国（現中国東北部）や北海道をはじめ津々浦々の人たちの名前が散見でき、当時の今熊山への信仰のあつさを物語っているものであった。

そのなかに「鉄製燈籠」と書かれた書類が綴っており、

「宮沢村（昭島市）の田村金右衛門を筆頭に、福生村の田村勘次郎を本店とする系列の店内と思われる十五名（店）の名が見え、奉納年月日は安政四年十一月吉日（一八五七）とあった。その一連の書類綴のなかに昭和初期『今熊山保勝会』で発行した絵葉書六枚があり、そのなかの一枚に一对の鉄灯籠が写っている。なかなか立派であり、しかもかすかではあるが「干」と読みとれる刻銘もある。

またもう一点の「国有境内譲与申請書」は戦後の昭和二十三年、国有地譲渡のため大蔵大臣に提出したものであるが、この書類綴のなかにも「鉄製燈籠」のことが略図とともに「境内参道傍に現存す」と記載されている。この灯籠は川口宮司の話では昭和二十四年頃までは実在していたそうである。当時近辺では昭和二十五年六月二十五日に始まった朝鮮戦争による金ヘン景気の影響であろうか墓地の花立、公園のくさり等が多く盗まれており、山火事に耐え、戦争時の金属類の供出をもまぬがれたこの灯籠も同様な被害にあったという。標高五〇五メートルの今熊山の山中で百年近くの風雪に耐えてきた四〇〇キロもある鉄製の灯籠までもが盗み取られるとは、まことに残念である。

この鉄製灯籠は本店干傘下の酒蔵・酒販売店十五店の主人たちが商売の繁栄を祈念し、安政二（一八五二）年頃より奉納が計画され、各店が資金を年掛で出しあって奉納したものである。

残された資料から、灯籠奉納までの経過を追ってみた。

安政四年十月十二日、本店の主人勘次郎は自から川口（埼玉県）の吹屋（鋳物師）永瀬長右衛門へ行き灯籠を注文し代金八十八両に取極め、この日手附金として十両を渡している。翌五年三月十日、平井村（日の出町）の石屋に台座石の作製、運び込、積立等を代金十三両で頼む、四月十四日灯籠出来あがる。二十四日、川口宿を船積し新河岸で降り、二本木（入間市）の酒造友野彌三郎宅まで運ぶ。そこから日光街道（国道十六号線）五日市街道を通り、今熊山まで運びあげる。その間、石屋は台座ならびに築地を積みあげ、灯籠の据付を行う。灯籠六尺二寸（一八八センチ）、石台座三重にして高さ三尺（約一〇〇センチ）、築地四尺（一一一センチ）総高さ壹丈三尺二寸（約四メートル）にて、六月十八日首尾よく建ちあがる。

ところが灯籠の屋根の先端に吊るす、風鈴十二個が届いておらず、飛脚を新兵衛新田（草加市）の店に出し、川口より取りよせて吊し、すべて完成する。

そして八月三日に店内の主人たち十五人が揃いの半纏を着し、其他店内の者たち大勢で今熊山に登山参詣し、別当へ奉納金を差しだし、山頂の茶屋で酒宴を開き、鉄灯籠の完成、奉納を祝った。

安政二年に奉灯を計画し約三年をかけ、ここに完成したのである。鉄灯籠建立の総費用は、川口からの運送代、石

工代、揃いの半纏代等五十二両壹分式朱と錢九貫九三二文であった。

またこの他明治四年に熊川村の石川弥八郎、中神村の中野久次郎他六名が発願主になり、大太鼓を奉納していたことがこの度の調査のなかで判明した。この大太鼓は東京で注文購入し、玉川上水を船便で熊川まで運んだようである。昭和十七年の大火災のさいに神官の母親が、近隣に火災の発生を知らせるために、山頂の拝殿で打ちならした大太鼓である。当時五日市町に居住の筆者は大太鼓の音を聞いた記憶がある。どのようにして火災をまぬがれたか不明であるが、現存しており、先年皮を張り替え、毎年秋の大祭には村の中を引いてまわる。

灯籠が盗難に遭い姿を消してしまったのは、まことに残念であったが、絵葉書、書類等がそろって残っていたのがせめてもの救いであった。

（みねぎし・ひでお 福生市史近世調査員 熊川在住）